

ホーソン作品における「父」と「息子」の諸相

—『七破風の屋敷』を中心に—

高 島 まり子

Mariko TAKASHIMA

序

『七破風の屋敷』はナサニエル・ホーソンの最高傑作とされる『緋文字』（1851年出版）の翌年に出版された長編であり、序文で語られるロマンス論が一際有名な作品でもある。当然ながら、アメリカのロマンス作家を自負するホーソンの描く「人間の心の真実」¹がいかなるものか、また『緋文字』との関連性はどうであるのか、関心を持たざるを得ない。テキスト『緋文字』を優秀だが未熟な若者ディムズデイル——普遍的な男性自我、あるいは若きアメリカの象徴とも考えられる——の姦通に始まる彼の「個性化過程」²（ユング心理学における）と捉え、序文「税関」と合わせてディムズデイル（あるいは普遍的な男性自我）・作者・アメリカ合衆国の三者の精神的自立を象徴的に描いた物語と考えることも可能だとする筆者の立場から見ると³、『緋文字』における「個性化過程」が『七破風の屋敷』ではどのように扱われているかが最大の関心事である。即ち、人間の意識発達過程におけるまだ未熟な「息子＝自我」が、「自己」との絆を結ぶことによって無意識の猛威（母性的支配力）や集合意識の抑圧（父性的支配力）との闘争（「竜との戦い」）に打勝ち、女性性あるいは創造性という「宝物」を獲得して自立し、最終的には意識と無意識を統合して「個性化」に至るプロセスは、どのように描かれているのであろうか。そのような視点から、本論では『七破風の屋敷』における「父」と「息子」の諸相を考察してみたい。『緋文字』では大きな問題であった母性的支配力については、ヘスターのような巨大な母性的人物が登場しないことから、本稿では人物像の考察には含めないこととする。

まず、Ⅰ章で「父」的人物を、Ⅱ章で「息子」的人物とその変容過程を、そしてⅢ章で新たな「息子」のタイプについて考察していく。

Ⅰ. 2種の「恐ろしい父」

既に拙論で述べたように、ホーソンの作品には大まかに2種の「父」的人物が登場し、各々否定的な影響力を発揮する場合が多い。地上的あるいは物質的価値観に従う者と天上的あるいは精神的価値を重視する者である。前提として、まずはこれらの人物像について『緋文字』を例にあげて述べておく。即ち、前者が彼の作品中で最も巨大で複雑かつリアルな悪魔的人物であるチリングワース、後者がピューリタン指導者達と彼らに代表されるピューリタン共同体である。彼らは、現実に

作家に強力な父性的影響力を及ぼした人物—母方叔父ロバート・マニングと父方のピューリタン先祖—から造形されたと見えそうだ。

叔父ロバートは作家の代父だが、彼の作家志望を無視し、実務家の将来を押しつけて嫌われた。彼がモデルと言われるチリングワースの人物像には、蛇やこうもりに喩えられる動物のような暗く野生的な面がある。ユング派のエリッヒ・ノイマンの『意識の起源史』に拠れば、人類の意識発達史において男性自我を脅かす「恐ろしい男性」元型像は文化史的に層を成して変容し、父親の権威が確立される前の母権制の心理を象徴する神話には「太母」に仕える危険な動物や神官として、次に母権制を支える「母方の伯父」として、更には自己破壊を意味する敵対的の双子児として現れる。そして父権的意識段階に達すると、2種の「恐ろしい父」に変容するという。本来の「太母」の傀儡という性格を維持する大地的な否定的「地父」と、意識発達をもたらした父権的価値観を反映する精神的権威を担う否定的「精神父」である(255-66 参照)。チリングワースは、未熟な「息子」段階の自我を象徴する「子どものような」⁴ ディムズデルを、無意識を通じた支配によって狂気へと追詰める、一種の「地父」であると考えられる。

同様に叔父ロバートは、ホーソン自身にとって「地父」的役割を担っていたのではないか。母子家庭から叔父一家への合流は、作家にとって母権的状况から母の権威を代行する男性(母方叔父)が実権を握る母権制末期の状況への移行と等価であったろう。したがって、少年期の自我段階にある作家の敵意の対象が、母親を支えて全権を握る「母方叔父(元型的には伯父)」だったことは、意識発達上の元型的配置に一致する。しかも、彼が実務家であると共に果樹の品種改良に取り組む著名な園芸家(19世紀当時では一種の科学者)でもあったことは、「地父」役割に一致する。物質や大地との結びつきは母権的価値に属し、天上的創造主に対抗する「地父」の特性だからである。以上のことから筆者は、叔父ロバートが心理的母権制に属す「恐ろしい地父」元型像を体現していること、それが作家の反感の一因と考えられることを付加したい。

彼と対照的に、父方のピューリタン先祖は、精神的価値を志向する「精神父」像を体現しているようだ。作家の分身である「税関」の語り手は、彼らのクエイカー迫害と魔女裁判を厳しく批判し、同時に作家業を蔑視する彼らの姿を想像する(『緋文字』10)。しかし、そのような批判は、彼らの信仰心や独立心への敬意と溶け合っている。その残虐行為も、地上に神の国を建設せんとする天上的価値観の行過ぎとも言えよう。短編「エンディコットと赤い十字」や「白髪の戦士」には、信仰の自由と独立のために毅然として戦う堂々たるピューリタンが描かれ、『緋文字』のピューリタン像にも作家の共感が織込まれ、彼が先祖にも肯定面を認めていることが推測される。ピューリタン神権体制に君臨した先祖は「精神父」元型像を担い、作家は両義的感情の絆で彼らと強く結ばれている。

ところで、『七破風の屋敷』に登場する悪役としての「父親」的人物がピンチョン判事であることは明白である。作品の時代背景は19世紀であるが、彼は、17世紀に当時としては贅の限りを尽くして七破風の屋敷を建てたピンチョン一族の「父」たる初代のピンチョン大佐に瓜二つという設定になっている。作者は、序文に掲げた「ある世代の悪行は子々孫々まで生き延び、一時的な美点はすべて自らはぎとって、ついには純粹にして抑制不可能な害悪となりはてるに至る」(2)という本

作品のテーマを体現するピンチョン一族の歴史を語るのだが、彼らの衰亡の原因はその初代ピンチョンの悪行にあるという。彼は植民地の権力者のピューリタンの一人であったが、マシュー・モールという貧しい男の土地を所有したいという欲望を満たすため、かのセイラムの魔女狩りに紛れて強引にモールを魔法使いとして処刑し、「神様がきやつに血をすすらせなざるぞ！」(9)というモールの呪いの通りに血を喉に詰まらせて急死したのである。その初代にそっくりな19世紀のピンチョン判事は、法律家・政治家として出世し、園芸愛好家で恰幅のよい初老の紳士である。「むんむんする土用の熱気のようなやさしさ」(119)を撒き散らし、にこやかな微笑によって「町通りでは真昼の太陽のように輝きわたり、私的な友人たちの応接間では、家庭の暖炉の火のように明るい光をはなった」(122)といい、「全世界もろともにすべてはかり知れないほどに広大な彼の心の中に受け入れて、彼らをあふれるばかりの暖かい愛情に浸していることを示す、無限抱擁的なやさしい光」(130)のみなき彼の表情は、その年齢や社会的地位も含めて指導者・保護者としての「父」にふさわしく思われる。しかしながら、この外面は、気に入らないことに会うと冷酷無慈悲なものに急変するのだ。それは、「明るい日光の輝いている風景と雷雨の直前の風景の違い」(118)のような激変であり、「大胆、尊大、無慈悲、かつ悪賢い人物で、おのが目的を深く心に秘めて、休息も良心の呵責も知らぬ執拗さをもって徹底的にそれを追求し、弱者を踏みつけ、おのが目的に欠くことのできぬときには、全力を尽くして強者を打ち倒そうとした」(123)初代との内面的共通性を示唆するものである。彼の秘めたる恐ろしい本性は、図らずもホールグレイヴの撮影した銀板写真に明瞭に映し出され、フィービーを驚かせるのだ。この内面と外面のギャップは詐欺師を思わせるが、偽名・演技・嘘などの仮面をかぶって内面を隠すのはチリングワースも同様で、ホーソンの「許されざる罪」を犯す者の常套手段でもある。また、彼は、富に対して貪欲であった初代と同様に「物を掴めば、まるで鉄の指でにぎりしめたように、てこでも離すことのない男」(122)だとも噂される。

よく知られているように、ホーソンはクエイカー迫害や魔女狩りに関して悪名を馳せた二人のピューリタン先祖の所業に対して改名までするほどの深い罪悪感を抱き、それが『緋文字』のピューリタン共同体の性格に投影されているところからも、無実の男を利己的野心から死に追いやった初代ピンチョンの人物像には、作者の先祖を含むピューリタンの情け容赦のない冷酷さや頑固なまでの実利性が反映されている。そう考えると、初代ピンチョンは17世紀当時のピューリタンの負の部分の体現する「恐ろしい精神父」と言えそうである。そして、一族の「父」たる初代そっくりの外見と内面を受け継いでいること、地域社会の「父」を自任するかのような寛大さを誇示する演技、法律の知識で身を立て、利己的で冷酷な本性とは裏腹に政界での名誉ある地位という社会の精神的権威を担っていることの3点から、ピンチョン判事もまた「恐ろしい精神父」の一人であると言えよう。

だが、彼の目的には、新天地アメリカに「丘の上の町」を建設しようとするピューリタンたちの高邁な理想はひとかけらもない。外面的には、出世した政治家として社会や同胞を背負う「父」の立場にあるものの、現在の彼を動かしているのは、隠された遺産（インディアンから不当に取り上げた広大な土地）への飽くなき所有欲だけである。そればかりではない。この遺産についての秘密を握っていると考えられるいとこのクリフォードの声を聞くと「彼の両眼に赤い炎がぱっと燃え立

ち、彼は、いわばその体全体から陰気にほとばしり出る、いいようもなくすさまじい、陰鬱なものかを身に帯びた姿は、「怒りや憎悪ではなく、それ自体以外のいっさいのものを絶滅させてしまう、ある激しい、凶悪な目的をあらわしているように見えた」という(129)。このようにひとつの想念の虜になり、その目的追求のプロセスによって悪魔化する人物としては、『緋文字』のチリングワースを連想せざるを得ない。異端としての錬金術に親しみ、アメリカの野生植物を活用する、自然や物質に密着した彼の「地父」イメージに対し、ピンチョン判事は、土地所有にとらわれ、いとこの娘たる若いフィービーにまで急接近を試みる、妙に動物的・性的イメージの非常に強い19世紀の近代的「地父」のイメージを担っていると考えられる。作者の叔父ロバートと同じく「園芸愛好家」であることも、「太母」的な大地につながる「地父」イメージを喚起して興味深い。ただし、自らの知的探求心の虜になったばかりでなく、不恰好な容姿や年齢の差ゆえに若く美しいヘスターに対して劣等感を持ち、暖かい家庭への憧れから無理な結婚をしたものの、夢破れてコキユの役割を押し付けられて傷つき、若く才能豊かなディムズデイルへの復讐心から悪魔化してしまうチリングワースの重厚な造型に比べると、ただ単に所有欲と息子に遺産を多く遺したいという利己的な動機で動いているに過ぎないピンチョン判事は、いかにも薄っぺらい印象を免れないのであるが、いずれにせよ、ピンチョン判事は「恐ろしい地父」と「恐ろしい精神父」の2種の否定的「父」像を兼ねていると考えられる。

ただし、彼はチリングワースの特徴とも言える、催眠術をはじめとする無意識を通じた内面的な支配とは無縁である。チリングワースがひそかにディムズデイルの姦通の罪を追求・発見した際の描写（彼の罪悪感を刺激するような言動や、催眠系の本を読んで眠ってしまった彼の衣服を剥いで胸に秘密の罪を発見する場面）や、彼の心を操作する方法は、19世紀当時にアメリカで流行ったメスメリズムの影響が見受けられる。しかしながら、『七破風の屋敷』においてこの催眠術を用いるのはピンチョン判事ではなく、敵対するモール一族の方である。一族は、先祖の受けた不当な仕打ちについて他者になんの悪意も持っていない、善意ある家族だというのが、「寡黙」という遺伝的な特徴によって周囲の人々から孤立する傾向があり、初代モールから「神秘的な力」、特に「他人の夢に影響を及ぼすという力」を受継ぎ、「いわゆる催眠術」を使ったといわれる(26)。この点に注目し、もう一人の「父」として、初代モールの同名の孫であるマシュー・モール（以後、マシューと記す）を取り上げる。

上記の噂を裏付けるのは、13章「アリス・ピンチョン」に描かれるマシューの行為である。この章には、初代ピンチョンの孫ジャーヴェーズ・ピンチョンの娘アリスを催眠術で破滅させた彼の悪魔的行為が、モール一族の子孫ホールグレイヴの脚色した伝説の形で語られる。即ち、ジャーヴェーズは、初代の急死の後に行方不明になったままの広大な土地の所有権を立証する書類についての手がかりをマシューが持っているのではないかと考え、彼がその書類を手渡せば、七破風の屋敷ともども敷地——初代ピンチョンが初代モールから不当に取り上げた土地——を彼に返すと約束し、マシューは、アリスを霊媒として霊界の初代ピンチョンたちと交信し、その書類のありかを突き止めようと申し出る。かなりの躊躇の後に、ジャーヴェーズは同意してアリスをマシューに委ねるが、霊たちから情報は得られず、したがって書類も入手できず、ただアリスだけが催眠術によってマシュー

の邪悪な意思に身も心も支配される隷属状態に陥ったままに終わる。結局ジャーヴェーズは、最愛の娘を土地の所有権への欲望の犠牲にし、破滅させてしまったことになるのだ。

ホールグレイヴはこのマシューについて当時の様々な噂を語るが、それは、彼がモール一族独特の「眼の魔力」を持ち、他者の心を見通したり、「他人を自分自身の心の中に引きずり込んで」霊界に使い走りにやらせたりすることも、「他人の夢の中に入り込んで、あたかも劇場の舞台監督のように夢の中の現象をおのれの思いのままに操る」こともできる不思議な力を持っているというものであった(189-90)。その噂通りに、アリスは催眠術によって時と場所を問わず無意識の内に彼の意のままに操られ、屈辱的な隷属状態の末に死を迎える。このような他者の心の支配形態は、チリングワースによるデイズデイルの支配や、短編「イーサン・ブランド」の主人公ブランドの「許されざる罪」に非常によく似ている。ブランドもまた、エスターという名の若い処女の魂を同様な方法で翻弄し、破滅させたのである。

ただし、このマシューとアリスの不幸な関係は、催眠術師と彼に支配される霊媒という単純なものに止まらない。そのような関係は、『ブライズデイル・ロマンス』のウェスタヴェルトとプリシラの関係にも描かれているが、マシューたちの場合は、二人の関係の背景や複雑な経緯が詳細に記述されている点が明らかに異なっている。まず、マシューに祖父の受けた不当な仕打ちと代々不当な待遇を受継いできたことゆえのピンチョン一族への深い恨みがあること、彼が「多大の誇りと頑固さ」(192)の持ち主であること、また彼が最初から美しく優しく誇り高いアリスへの強い関心を抱いていたこと、同時に彼女もまた初対面で彼の容姿と力と精力に感嘆し惹きつけられたこと、そしてそれを隠そうともしなかった視線ゆえに彼の激しい怒りを招いたこと、彼の行為のいかかわしさを感知した父親の制止を彼女が自ら振り切って彼との交流に進んでいったこと、などである。

確かに、18世紀当時の上流社会における家父長的価値観の中で、娘が父親の命令に逆らうことは不可能であったらうから、第一義的には、アリスは父親の土地所有の欲望の犠牲になったと言える。しかし、彼女がマシューの男性的魅力に惹きつけられたことは事実であり、それが途中の父親の制止を振り切って、自ら彼の術中に落ちる結果を招いた一因である。高尾直知氏が述べるように、彼女のセクシュアリティの主体性が内側から彼女を裏切ったのである。(高尾 42)本能的に危険を察知しながら敢えて彼との接触に突き進んだ可能性も示唆されており、それほど彼女が彼に惹かれていたと考えられる。しかも、自らも家父長的女性観によって生まれ、処女に無垢と聖性を押し付けるジェンダー意識にとらわれて、彼女は自身の性的欲望とその危険性を自覚することができない。それゆえ、「自ら自分自身を裏切らぬかぎりはおのが領域を難攻不落の城と化することのできる——美と、気高い、穢れのない純粹さと、女性に備わった自己保存の力の結びつきあった——ひとつの力」(203)を過信して、父親の制止を振り切ってまでマシューの力に対峙したのである。また、処女の無垢を標榜するジェンダー意識にも拘らず、初対面の際に彼への強い性的賞賛の念をあからさまに顔に出すという行為は、相手が身分の低い労働者であるという階級意識ゆえの彼女の無意識の差別感を示しているのではないだろうか。彼女は、「純粹な処女」であると同時に、「ある穏やかな、冷やかな美麗さのために世の中の卑しい大衆から引き離され」たような「貴婦人」(201)と描写される。即ち、繰り返し言及される彼女の「誇り高さ」は、18世紀の家父長的価値

値観におけるジェンダー意識と階級意識が生み出したものであり、この内なる要因が彼女を破滅に導いたと言えるであろう。

一方、マシューの側にも催眠術の能力以外にも悲劇の要因があった。祖父の受けた不当な仕打ちと代々不当な待遇を受継いできたことゆえのピンチョン一族への深い恨みと、彼自身が「多大の誇りと頑固さ」(192)の持ち主であることだ。両者があいまって、彼は、自分へのアリスの性的な賞賛の視線に誇りを傷つけられ、「この娘は、このおれを、まるで獣かなんぞのように見ようってわけか！」(201)と激怒し、自分が人間の精神を持っていることを証明してみせると内心誓うのである。身分の違いゆえに不当な仕打ちに甘んじなければならなかった一族の過去が、彼の階級制度への反発とピンチョン一族への恨みを生んだのは当然である。したがって、彼はアリスの賞賛の眼差しの内に階級的な差別意識ゆえの露骨な性的意味を読み取ったに違いない。仮に、彼が同じ階級の男性であれば、あるいは先祖が虐待された過去がなければ、そのような差別意識を読み取ることも、その必要もなかったであろう。同時に、彼自身の中にもアリスに処女の無垢を当然の属性として求め、性的欲望の自由な発露を認めない家父長的価値観が根付いていたのかもしれない。彼は、無垢であるべき処女アリスに、それも自ら異性としての大きな関心と好意を抱いていた彼女に、男性性への賞賛を露骨に示され、動物的な欲望の対象としてしか見られなかったと誤解した。それは、激しい屈辱感となって彼の高い誇りを踏みにじり、精神的に彼女を屈服させずにはおかない気持ちに追い込んだのであろう。即ち、マシューの上流階級への反発と家父長的女性観、そして自らの神秘的な能力ゆえの誇りが、彼を邪悪な「許されざる罪」へと誘ったと考えられる。

また、若き魔法使いマシューはアリスを支配し、心身ともに破滅させたばかりではない。現在までモール一族は、初代への残酷な仕打ちや土地の取奪についてのピンチョン一族に対する敵意を行動で示したことも、公然と表現したこともない穏やかな人々だったと作者は言う。しかし、マシューとアリスの一件は、人間に害をなす魔法使いとしてのモール一族の邪悪な潜在能力を暴露し、それが子孫にまで——ピンチョン判事の罪と忌まわしい性格が子孫に継承されるように——伝わることを示唆する。その意味で、マシューは、子孫ホールグレイヴに邪悪な遺産を受継がせて支配しようとする「恐ろしい地父」と考えられるのだ。実際、ホールグレイヴは、七破風の屋敷の一隅から現在のピンチョン一族の状況を冷静に観察し、銀板写真で撮影することによって現実の生活では見えない人の心の内奥まで覗き、フィービーに自ら語ったように催眠術にも秀でている。即ち、彼はモール一族の末裔にふさわしく他者を支配する能力を受け継いでおり、その意味で初代モールやマシューは、「恐ろしい地父」として「息子」である彼を支配下に置いていると言えよう。

こう考えてくると、「恐ろしい地父」と「恐ろしい精神父」を兼ねた初代ピンチョンやピンチョン判事は意識世界・昼の支配者であり、催眠術を使う「恐ろしい地父」の初代モールやマシューは無意識世界・夜を支配する。⁵ いわば、前者は『緋文字』のピューリタン共同体の否定面とチリングワースの悪魔性の一部を、後者はチリングワースの悪魔性の内の覗き見や催眠術の部分を各々受継ぐ、二種類の「恐ろしい父」と言えよう。

II. 二人の「息子」

次に、『七破風の屋敷』における抑圧され、自立を目指す「息子」について考えてみたい。『緋文字』に見られた、独立しようとする「息子」を「恐ろしい父」が阻止し、支配しようとする構図は『七破風の屋敷』にはどのように見られるのであろうか。

まず、ピンチョン判事は、その性格や立場上、初代そのままに一族すべての、あるいは地域社会の「父」であり、支配者と言ってよいであろう。しかし、直接の犠牲者、即ち支配の対象はいとこのクリフォードである。ピンチョン家の当主であった叔父の遺産相続人として若い頃のジャフリー・ピンチョン（まだ判事ではなかったどころか、やくざ者であった）のライバルであった彼は、ジャフリーによって叔父殺しの濡れ衣を着せられて30年間も牢獄に繋がれた後、彼が広大な所有地の相続に関わる秘密を知っていると思い込んだジャフリー（現在はピンチョン判事）によって解放され、同時に新たな脅迫を受けることとなった。投獄も解放もクリフォード本人の与り知らぬところでピンチョン判事が操作しており、その意味では操り人形師が人形を操るような完全な支配形態である。これは、無意識を操作して罪悪感を病的なまでに刺激する精神的拷問の方法を除けば、チリングワースによるデムズデイルの支配によく似ている。しかし、年齢も近いとこのクリフォードが「父」ピンチョン判事に支配される「息子」というのは不自然ではなからうか。また、社会全体の「父」的な地位にある後者に比べ、クリフォードはデムズデイルのようにピューリタン共同体の優秀な後継者といった、社会全体の「息子」の立場にもない。それどころか、冤罪によって人生の大半を空しく惨めに失った老いた敗残者なのである。

しかしながら、クリフォードの「子ども」のような性格、あるいは状態を示す描写が多いのも事実であり、デムズデイルの子どもっぽさを強調する描写を思い出させる。フィービーは彼を「優しい子どものようなお方」(125)と形容し、大好きなハチドリを見ると「彼はふたたび子どもになっていた」(148)と表現される。また、ピンチョン判事の接近に対しては「おびえた子どもほどにも自分を守る力をもたず」(129)に泣き叫ぶ。これは、一つには作者が「彼の寿命のあるかぎり、子どもだった。実際、彼の人生は、子どもの時期を過ぎたか過ぎないうちに停止してしまっ、その記憶という記憶をその時期に凝縮しているかに見えたのである」(170)と述べるように、彼がごく若い頃、いとこの邪悪な企みによって投獄され、世間から隔絶されて30年もの長い年月を孤独に過ごしたためであることは間違いない。身に覚えのない殺人の罪を着せられるという激しいショックを経験したために、その経験よりずっと前の時期に意識を集中してしまう傾向があり、また、長い獄中生活により人間が成熟に至るための現実の経験が欠落しているのであるから。

それに加えて、彼の生来の性格をも考慮しなければならない。彼の肖像画は、「ぶあつく感じやすそうな唇を持ち、思考能力というよりはむしろ、優しい、官能的な情緒を表しているように思われる美しい眼をした、夢見るような」(32)容貌を描き出している。彼は美的感覚が異常に鋭敏で、「あらゆる美しい、楽しいものにかかわることを機能とするある繊細な気質」(108)の持ち主であり、ホーソン作品に特徴的な芸術家のタイプと言えよう。即ち、短編「美の芸術家」のオーウェン・ウォーランドのように浮世離れた夢想家で、現実生活にはほとんど役立たない。確かに、ク

リフォードは、幸福になることこそがふさわしく、ほかの目的には無力な一種の「遊蕩児」(108)であり、永遠に社会の「息子」なのである。このタイプには、実社会に有用な職業人として堅固な経済的基盤を築く自信の欠如に悩まされた作者自身が投影されているに違いない。こうして、クリフォードとピンチョン判事の間には、年齢とは無関係に、邪悪な「恐ろしい父」に支配される「息子」の構図が当てはまるのである。

このような生来子どもっぽい上に30年も世間から隔絶されていた一種のリップ・ヴァン・ウィンクルとも言えるクリフォードが、新しいものについていけない「保守主義者のうちでも最も根深い保守主義者」(161)であるのも当然であろう。また、世間との個人的接触には耐えられず、屋敷に閉じこもらざるを得ないのも理解できる。にも拘らず、あるいは、それゆえにこそと言うべきか、彼は群衆のざわめきには異様なまでに刺激を受けるのだ。ある政治的な行列が騒々しく屋敷の前を通り過ぎようとした時、彼はその群衆の中に二階からあやうく飛び降りようとしたのである。彼の眼には、その行列が「ひとつの集合体として——滔々たる水勢をたたえ、神秘の色を黒々とほらみ、その深い水底からその人間の中の同じように深い心の底に呼びかける巨大な生命の流れとして」(165)映ったのかもしれない。そして、もし実際に飛び降りて死なずにすんだなら、彼が言うように「別の人間に生まれ変わった」(166)のかもしれない。「人生の大海に深く深く飛び込み、その底に沈み、その深みに包まれ、それから水面に浮かび出ることによって目覚め、活力を得、世の中と自分自身に復帰する必要があったのかもしれない」(166)という作者の言葉は、ヨナの復活や「冥界下り」による再生を連想させる。このようなプロセスは、太陽神話の「夜の航海」に象徴される心理的再生過程で、『緋文字』ではヘスターとディムズデルによる共同体と森との往復に見られる。精神的に行詰った彼らと同様に、生の実体の欠けた、半分死んだようなクリフォードの心には、個々の人間が一つの塊に溶け合った、即ち「巨大な生命の流れ」である集合無意識の母胎に復帰し、そこから新たな生命力を獲得して再生するプロセスが必要であったに違いない。しかし、それは実際の死を招きかねない危険を伴うこともまた事実である。このクリフォードの飛び降り未遂の場面は、短編「ぼくの親戚モリノー少佐」の主人公ロビンが騒がしいリンチの群衆に加わろうとする場面によく似ている。その時ロビンを引き止めた謎めいた紳士は、このような「冥界下り」に伴う危険性をよく認識していたのであろう。

ところで、17章「二匹の梟の逃亡」には、ついに一種の「夜の航海」を実行に移すクリフォードの姿が描かれている。ピンチョン判事の急死を発見した彼は、激しい解放感に興奮し、妹ヘプジバーを急ぎ立てて陰鬱な屋敷からの逃亡を試みるのだ。そして、飛び乗った汽車の中で平凡な常識人に向かって科学の進歩や社会の発展への熱狂的な信仰を語り、果てはメスメリズムへの共感や犯罪者の自由と権利の擁護まで一席ぶって、相手を煙に巻くのである。異様なまでの彼の高揚状態、生命力の回復と外見にまで表れた若返りは、森でヘスターと再会し、脱出を夢見たディムズデルの解放感と精力の回復、共同体への帰途の興奮を思い起こさせる。明らかに、この場面は彼の森への往復のパロディであろう。その状態が長続きしないのも共通しているが、自ら犯した罪のゆえに母性的、並びに父性的支配力を認識し、それらから切離された孤独と人類同胞への深い共感に目覚め、とるべき道を求めて激しい苦悩に耐えてきたディムズデルに比べると、クリフォードの苦悩も解

放感も、芯の通っていない無責任で子供っぽいものに見えてしまうのも否めない。

結局のところ、彼はディムズデイルのように自らチリングワースを拒否したのではなく、ピンチョン判事の急死という偶発事件に救われたに過ぎない。不幸の始まりも終わりもピンチョン判事に依存しており、彼は完全な操り人形といった立場である。しかしながら、無我夢中の興奮状態にせよ、彼が無意識の生命力の奔流に身を任せ、邪悪な過去の象徴たる屋敷を脱出し、発作的な逃亡であっても自由を求めてさ迷ったこと自体、彼の一人の人間としての尊厳を垣間見せてくれるものではなからうか。彼は、その時点での自分に可能な限り、生の混沌への接近を試みたのである。彼は、最終的には以前の知的無感覚状態には二度と戻らず、身につけていたかもしれない能力をかなり回復して、幸福になったという。即ち、精神的死の状態と極限の自由を二つながら体験したからこそ、自身の現実に足をつけて実体ある「自己実現」が可能となったのである。その意味で、「息子」クリフォードは、彼なりの「個性化」を果たしたと考えられる。

一方、モール一族の「息子」ホールグレイヴはどうであろうか。彼は先祖の蒙った被害ゆえにピンチョン一族への恨みを持ってはいるであろうものの、クリフォードのように「恐ろしい父」に直接支配されている「息子」ではない。むしろ、催眠術を使って他者を支配する加害者になる可能性を秘めているのだ。換言すれば、一族に特有の「視覚マニア」の一面や、「恐ろしい地父」マシューから受継いだ邪悪な催眠術といった加害者・支配者となり得る能力と資質が、一族の「息子」としての彼を支配する可能性がある。彼には、その力をどう活用し発展させるかが問われているのである。

作者は、彼をフランクリンのような独立自尊の若者として描く。彼は貧しい生まれで、幼いころから自活を余儀なくされ、意志の力と独立心によって21歳の若さにもかかわらず様々な職業経験を持ち、立派に現実を生き抜いている。しかも、その変化に富んだ経歴にもかかわらず、「決して自分を見失ったことがない、……一度も内なる自分自身を侵したことはなく、常に良心をしっかりと守ってきた」(177) 信頼に値する人物であり、「内奥の力の深い自覚」こそ「彼の性格の真の価値」(180) だと述べる。作者は、そういったエマソンの自己信頼を擬人化したような彼が、「生まれ故郷におけるあまたの同輩の代表者として立つにふさわしい」(181) とも言う。彼がアメリカの未来を背負う若者、即ちアメリカ社会の後継者としての「息子」である、とでも言いたげな様子である。確かに自分が現在の社会を根底から変え得る力を担っているという、彼の青年らしい高慢な信念もそれを裏付けている。こうしてみると、作者が期待をかけている新しいアメリカの「息子」としての可能性の開花をも、併せて彼の肩にかかっていると見えよう。

しかし、一方で彼は、七破風の屋敷の一隅から現在のピンチョン一族の状況を冷静に観察し、銀板写真で撮影することによって現実の生活では見えない人の心の内奥まで覗き、フィービーに自ら語ったように催眠術にも秀でている。観察・覗き見という「視覚マニア」の行為と催眠術による支配は、「イーサン・ブランド」以来、ホーソンの作品で繰り返されてきた「許されざる罪」特有の行為であり、ディムズデイルに対するチリングワースの邪悪な支配の中心をも占める。こういった暗い性癖を持つホールグレイヴが最後に選択した道は、一般に唐突で不自然なハッピーエンドとして不評なフィービーへの愛の告白と結婚であった。だが、この結末は、既に13章「アリス・ピンチョン」と14章「フィービーの別れ」に、その可能性が示唆されていると考えられる。

14章で、物語の朗読を聞いていたフィービーは、マシューがアリスに向かって行なった催眠術の身振りを、熱意のあまり実演してしまったホールグレイヴに反応して、無意識状態に陥ってしまう。彼にその気さえあれば、あとほんの一振りの手の動きで彼女の精神を完全に支配することができたのである。しかし、彼はそうする代わりに、呪文を解き、彼女が眠りに落ちかけたのは自作の物語が退屈だったからだと言談にしてしまう。これは、彼らの関係が物語で語られるマシューとアリスとの関係に陥る危険性に直面していたことを示す。そして、マシューと同じく純粋な処女の魂を自由に操れる状況に遭遇した時、ホールグレイヴが敢えてその道を放棄したことは、両家の過去の確執と先祖の「恐ろしい地父」の支配圏にある彼の立場を考慮すれば、特筆に値する。この「人間精神に対する絶対支配権」を獲得する機会を放棄し、フィービーの人間としての尊厳を守った彼の選択を、作者は、他者の個性を尊重する「高潔な心」(212)の証として賞賛する。だが、そればかりではない。彼はその支配力を放棄することによって「恐ろしい地父」マシューの支配から脱出したのである。

彼は過去から、そしてそこに住む人々、なかんずくピンチョン判事とクリフォードとの関係を注意深く観察することから、学んでいたとも考えられる。ここには、クリフォードのように目立った「夜の航海」を決行することはしないが、冷静な観察と思索から学び、独立に生かす新たな「息子」のタイプが描かれていると言えないだろうか。彼は、『過去』や『死人』の悪影響をあげつらい、嫌悪すべき『過去』を「どういうふうにも憎んだらいいか一層よく知るために」(184)その『過去』を象徴する七破風の屋敷にしばらく住んで観察・思索に耽っているのだとフィービーに語る。そして、代々の家族を根付かせ繁栄させたいという初代ピンチョンの利己的欲望がすべての災いの源であり、血統にしても建物や社会制度にしても、堅固に古くなるまで継続することを否定し、古いものを破壊して常に新しく更新・再生することに価値を置くのだと言う。その言葉通り、彼が付き合うのは改革主義者や禁酒運動家、博愛主義者や社会主義者などといった、現体制に不満を抱き改革を志す連中である。しかし一方で、「自分で問題を観察し、説明して、ほとんどこの二百年ものあいだ今あなたと僕とが踏みしめているこの土地に長々と続いてきた劇を理解」(216)するつもりだと言う。即ち、過去を否定するにしてもやみくもに破壊するというのではなく、それから冷静に学んでその悪影響を清算し、より良い未来を創造することに重点があるのだ。

そもそもアリスの伝説物語も、彼が、過去の先祖の罪が子孫にまで継承され、不幸や災いをもたらすという考えにとりつかれたので、「それを振り捨てる一つの方法として」(186)創作したのだと言う。即ち、人生の深刻な問題を打開するための一つの策が物語の創作なのである。そして、完成した作品は、ピンチョン一族の尊大な階級意識や強欲、利己主義への批判と共に、モール一族が継承してきた神秘的能力やそれゆえの孤立、マシューとアリスの傲慢さ、彼がアリスを弄んだ催眠術を使った魂の支配の邪悪さ、などへの深い認識を示しているのだ。したがって、二人の物語は不幸な結果に終わったとはいえ、これらの障害を克服すれば彼らの愛の萌芽が成就するかもしれない、という可能性をも示している。二人は互いに異性として好意を抱き合っていたし、アリスには高い誇りばかりでなく「女性的なもの——優しさ」があったし、マシューには「まぎれもなく一人の男であり、彼女と同じ要素からできている人間であること」を、即ち自身の精神的価値を彼女に認め

て欲しいという願望があったに違いないからである(201)。それによって、若い男女が両家の因縁の対立を解消する可能性の芽はあったのだが、二人の階級意識・家父長制におけるジェンダー意識・誇り高さなどに阻まれて、その可能性は踏みにじられたのだ。ホールグレイヴの創造活動自体が問題解決への道を示しており、フィービーへの催眠術を自ら封印したことは、物語に内包される問題解決への道筋の第一歩を彼が現実には踏み出したことを示すと言えるのではないだろうか。愛の告白と結婚という結末は、その道の到達点であると思われる。

III. 結び

では、この「他者を観察し、思索を経て個性化に至る傍観者」という「息子」の新タイプは、『緋文字』には全く見られなかったかということ、そうとも言えない。確かにテキスト『緋文字』には、一方的にチリングワースに覗かれ、無意識の内に支配されたあげくに、ヘスターに導かれた森への「夜の航海」を経て個性化に至る「息子」デイズデイルしか登場しない。しかし、拙論でも述べたように、序文「税関」の語り手は、ピューリタン先祖と叔父ロバート・マニング（あるいは、叔父に象徴される現実の富や名声）という2種類の「父なるもの」（「精神父」と「地父」）と「母なるもの」の支配力に抑圧された「息子」たる作者の内面の投影であり、新たな理想の「父」ピュー氏に導かれ、テキスト『緋文字』の執筆によって再生・自立を果たすのである。まるで、『緋文字』の執筆活動が彼の「夜の航海」の役割を果たしているかのように、彼は、デイズデイルとは違って最初から自身を抑圧する支配力を意識し、理解している。また、デイズデイルとは逆に、彼自身が税関の内外にたむろする様々な人々をじっくり観察し、分析し、描写している。つまり、「税関」の語り手は、ホールグレイヴに非常に似ているのである。ホールグレイヴは、作家としてピンチョン一族の歴史上の事件からアリスの物語を創作したのだという。これまた、ピュー氏の伝えた物語としてテキスト『緋文字』を創作した「税関」の語り手と似ている。そして、ホールグレイヴは、物語に内包された若きマシューと誇り高きアリスの傷ついた関係を修復するかのよう、フィービーとの愛を成就するのである。物語を語ることによって救済に至るというパターンは、「税関」の語り手も同様である。彼は、テキスト『緋文字』を語ることによって作家として自立し、父性と母性の否定的な支配力を克服するのであるから。こう考えてくると、『七破風の屋敷』のホールグレイヴは、「税関」の語り手のようなテキスト外部の視点的存在が、物語テキストの内部に登場人物として入り込んできた姿のように思われる。

じっくり観察し、思索を重ね、創作活動によって問題解決の道を探求する、このような新たな「息子」のタイプは、ホーソンの創作活動がいかにか彼自身の内的問題の探求とその解決に深く関わるものであったかを示すものであろう。一般に覗きや観察は、他者の心の聖域を侵す「許されざる罪」として作者自身からも読者からも批判されてきた。しかしながら、新たな「息子」のタイプは、そのような行動を文学作品の創作という芸術活動と結び付けることによって、それが内包する一つの肯定的な可能性を提示していると考えられないだろうか。「許されざる罪」の主題とも関連させつつ、他の作品をも含めて更に考察しなければならない。

註

- ¹ Hawthorne, Nathaniel. *The House of the Seven Gables*, Vol. II of *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*. Ed. Roy Harvey Peace, et al. Columbus: Ohio State UP, 1962-1978. p.5 以下, 本稿における『七破風の屋敷』からの引用文は, 全てこの版を用い, 括弧内に頁数のみ示す. なお, 和訳は大橋健三郎・石川欣一・中野好夫訳を使用.
- ² 「個性化過程」: 「無意識を意識に統合する」過程 (ユング『元型論』88) であり, 「もろもろの無意識の諸要素 (元型) を意識化して統合し, それによって個性的な単位としての全体性を実現する」(林『ユング思想の真髓』235), あるいは「個人に内在する可能性を実現し, その自我を高次の全体性へと志向せしめる」過程 (河合220-21). その中心は「意識と無意識とを含んだ心の全体性の中心」たる「自己」である (同).
- ³ 以下の拙論を参照されたい. 私見では, テキスト『緋文字』は, 男性性の象徴たるディムズデイルと女性性の象徴たるヘスターが手を携えて「個性化過程」を歩む物語であると考えるが, 本稿では男性性に焦点を絞って記述した.
- *ディムズデイルの精神的変貌——自我発達の元型的プロセスについて——鹿児島女子短期大学紀要 第26号, 1991.
- *ヘスターとブシケー——『緋文字』に潜む女性的心理発達のプロセス——鹿児島女子短期大学紀要 第29号, 1994.
- *『緋文字』に秘された新たなる神話——女性性と男性性の統合——鹿児島女子短期大学紀要 第34号, 1999.
- *『緋文字』における「夜の航海」——ヘスターとディムズデイルの「個性化過程」——鹿児島女子短期大学紀要 第36号, 2001.
- ⁴ Hawthorne, Nathaniel. *The Scarlet Letter*, Vol. I of *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*. Ed. Roy Harvey Peace et al. Columbus: Ohio State UP, 1962-1978. p.66 以下, 本稿における『緋文字』からの引用文は, 全てこの版を用い, 括弧内に頁数を示す. なお, 和訳は八木敏雄訳を使用.
- ⁵ 作者は, これを, 「ピンチョン家の人間は, その生まれ故郷の町の真昼間の街頭では傲然とふるまっていたとはいっても, 一歩混沌とした眠りの共和国に踏み込むや, まさにこれら平民であるモールたちの奴隷同然にすぎなかったのである (26).」と表現している.

参考文献

- Fiedler, Leslie A. *Love and Death in The American Novel*. Illinois State University, Dalkey Archive Press, 1997. (邦訳 レスリー・A・フィードラー『アメリカ小説における愛と死』佐伯彰一・井上謙治・行方昭夫・入江隆則訳 新潮社 1989年)
- Hawthorne, Nathaniel. *The Scarlet Letter*, Vol. I of *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*. Ed. Roy Harvey Peace et al. Columbus: Ohio State UP, 1962-1978.
- *The House of the Seven Gables*, Vol. II of *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*. Ed. Roy Harvey Peace, et al. Columbus: Ohio State UP, 1962-1978.
- Jung, C.G. The Concept of the Collective Unconscious (Journal of St. Bartholomew's Hospital), 1936-37. (邦訳 ユング, C. G.『元型論』林道義訳 紀伊国屋書店 1982年, 1990年)
- アーリッヒ, グロリア・C『蜘蛛の呪縛——ホーソンとその親族——』丹羽隆昭・大場厚志・中村栄造訳 開文社 2001年
- 岩田強「はらからの絆——ホーソンの描かなかったく愛——」光華女子大学英米文学会編『夢の変奏——英米文学に描かれた愛——』所収 大阪教育図書 1994年
- 大杉博昭『灯心記——作家・詩人論他十二章』近代文芸社 1990年
- 河合隼雄『ユング心理学入門』培風館 1990年
- 成田雅彦『『緋文字』とく父親の誕生』『緋文字』150周年記念論文集刊行委員会編『緋文字の断層』開文社 2001年
- ノイマン, エリッヒ『意識の起源史』上・下 林道義訳 紀伊国屋書店 1984年

(2007年12月5日 受理)